

近代日本の〈東亜の朱子学〉と李退溪

——「崎門」および「熊本実学派」における李退溪をめぐる議論と「道義」

姜 海守

「朝鮮の思想が日本の政治に関与したことが大きい。例を挙げれば、明治天皇に侍講し奉つた元田氏は真に朝鮮の大儒李退溪の□□□□「判読不可」を申上げたのである。

「……」陛下の股肱たる光榮に輝く諸君は、この際、この矜持のもと真に内鮮一体の道義を弁へ、君国のためお御奉公あらんことを切望する次第であります」（「蘇峰翁の志願兵に対する講演」一九四〇年）

一 「半島に於ける道学の教祖、道義哲学の創唱者」としての李退溪像

本稿は、日本の代表的な李退溪（李滉、一五〇一—一五七〇）研究

者であつた阿部吉雄（一九〇五—一九七八）が京城帝国大学助教時代の一九四四年に「日本教育先哲叢書」第二十三卷（最終巻）として著した『李退溪』に至るまでの、近代日本における李退溪研究の歩みを思想的側面から考察するものである。そのための分析対象となるのは明治時代以後の「崎門」（山崎闇齋学派）と、「熊本実学派」の李退溪をめぐる議論である。『李退溪』出版前後およびそれ以後の日韓両国の李退溪言説について、筆者はすでに、いくつかの論文を公刊した¹⁾。これらは当該時代の李退溪言説を主に「道義」という鍵概念から捉えようとしたものであるが、本研究で明らかとなつたことは、明治時代の李退溪言説が、「道義」という観点から捉えることが困難であり、またそれはその後の李退溪言説と連続し

ていないことである。明確な形で「道義」という視点から李退溪を論じる阿部の『李退溪』の登場は、必ずしも李退溪言説に限らず、その前後の帝国日本および植民地朝鮮における多様な言説空間の変化に繋がりをもつものであり、これらの変化のあり方をすべて論じることが本稿の範囲を超えている。

『李退溪』の「はしがき」において、阿部吉雄は、「意ふに退溪先生は半島に於ける道学の教祖、道義哲学の創唱者」であり、「近世日本精神史上の一代先覚者、山崎闇齋先生によつて深く摂取されたゞけでなく、我が国体の本義、伝統の精神に基づいて極めて高く止揚された厳然たる事実を知るのである」と述べている。また阿部は「退溪先生の思想はやがて間近に山崎元田両先生の思想に通ずるものであることを看過してはならない。即ち端的に言へば、両先生の思想は皇国の道に本づいて孔子や朱子や退溪先生の道義思想を融会し醇化し又止揚したものであつて、此に於いて一般的な仁義道德の教は実に皇国の道の中核とする仁義道德の教として説き出されてゐる⁽³⁾」という。これらの文章には、李退溪が「半島に於ける道学の教祖、道義哲学の創唱者」であること、また江戸時代前期の儒者山崎闇齋（一六一九—一六八二）および幕末明治期の儒者元田永孚^{ながぶ}（号は東野、一八一八—一八九一）の「皇国の道に本づいた」思想が「孔子や朱子や退溪先生の道義思想を融会し醇化し又止揚したものである」ことが語られている。すなわち、彼らの「道義思想」とは、

「一般的な仁義道德の教」とは異なる「皇国の道の中核とする仁義道德の教として説き出され」たものである。特に李退溪に関しては、「我國の先哲、特に尊皇の志士達が意外に多く李退溪を尊信したのは、何れもその高潔な志操に感じ、深遠な思想に共鳴する所があつたからである。此等の人達は何れも深く退溪の思想を掬し、而も皇民としての心魂を養つた。否、真の皇民としての心魂を養はむがために退溪の思想をも参考として研究したのである」と強調されている⁽⁴⁾。さらに、阿部は、「退溪先生は半島に於ける道学の教祖」であり、「近世の儒学は惺窩・羅山を経て闇齋に至り一步一步と純化され、内面的に深く研究され、元明清の朱子学の上に出づる様になつたと観察されるのであるが、闇齋がその「道の学」を建設するに当つて深く李退溪の学を摂取したと云ふことは従来注意されなかつた所である」と述べる。阿部は、まさに、闇齋が「道の学」、すなわち「道学」を「建設するに当つて深く」「半島に於ける道学の教祖」である「李退溪の学を摂取した」ことを明らかにしようとしたのである。

以上のように、阿部は『李退溪』で李退溪を「半島に於ける道学の教祖」と捉えながら山崎闇齋および元田永孚の「道義思想」を李退溪のそれとの関わりで論じているが、特に山崎闇齋の思想を「道義」的な点から照明しようとする立場は、すでに一九三九年の論考に表れている。阿部は「闇齋の知と云ふのは広く知識を謂ふのでは

ない。時処位によつて先変万化すべき父子の親君臣の義等を、其の時処位に応じて本然の義理善悪差はざる様に究明することを謂ふのである。即ち朱子が宇宙心性に向つて窮理尽性を説いたのを範圍を狭め、特に義理道德の世界に考察の中心を置いた。そしてこの知を致す要法としての読書に就いても頗る範圍を限定するものがあつた^⑥と、「闇齋の知」を「義理道德の世界に考察の中心を置いた」ものとして捉えているのである。阿部はまた、「一体日本は武力を以て推進力とし、詩情に生きるの心を以て日常性となして来たとの説があるが、この説は日本人の義理道義を以て生活を規定し武力の原動力となして来たと言ふ重大な事実を見逃してゐると思ふ^⑦」という。日中戦争の勃発後に発表されたこの論考においては、日本の「武力の原動力・推進力」の根源には「日本人の義理道義」があることが強調されているのである。すなわち阿部は、「国体や忠孝や節義や名分や出処等の實際の活問題に」^⑧おいて「義は泰山よりも重しと云ふやうな我国独特の土風を養成せる点に思を致せば闇齋の史上に於ける地位は愈々其の光をます。かくて我々は崎門の人々の言行を通じ、儒教の眞精神の一端にふれ日本儒教の進むべき道に就いて暗示を得ると共に現代教育の諸々の弊害に就いて深い反省の眼をそゝがざるを得ない」と述べているのである。^⑨「我々は崎門の人々の言行を通じ、儒教の眞精神の一端にふれ日本儒教の進むべき道に就いて暗示を得る」という阿部の山崎闇齋および「崎門の人々」に

対する視点は、一九三六年から翌年にかけて刊行された日本古典学会編『山崎闇齋全集』の「序」にみられる山崎闇齋像と連続するものと述べてもさしつかえないであろう。

道の方策に在るや、流れて東海に入りしより千有余年。その間聞いて之を得たるもの果たして幾人ぞ。王仁氏は古し矣。下つて藤林二先生に至りては、その調詣する所果たして如何。吾未だ敢へて之を知らず。独り山崎闇齋先生あり。〔……〕嗚呼朱子の後、巨儒碩学輩出屈指に違あらずと雖も、能く其の道統を継ぐ者、二蔡黄李諸子の外、薛文靖、李退溪のみ。吾が闇齋先生、遠く本朝に生れ、千載不伝の学を遺経に得、義理精確、体統醇全、其の学、その巧、豈に朱門以下、元明諸儒の及ぶ所ならんや。実に朱子以後の一人と謂はざる可からず。是百世の定論、予の私言に非ざる也。〔……〕蓋し先生没して今に二百五十有余年。日本儒学史上に於ける山崎学は、鬱然たる一大正宗を形成するに至れり。夫の尊皇論發達史上に於ける山崎学派の偉業の若きは、世已に定論あり。予復贅せず。〔……〕仰で道学の高標なるを見、伏して伝心の深遠なるを察す。^⑩

また、一九三八年に公刊された『山崎闇齋と其門流』の中で熊本の第五高等学校教授を務めていた中国哲学者の内田周平（二八五四

一八九四)は、「崎門の学は、道理の研究を以て第一義となし、最も力を用ゐる所は其の講義と体験躬行とに在りて、他の儒家の如く訓詁詞章に刻意せざりしかば文章巧みならず、著述多からず。〔……〕然れども哲学の思想に深く、道義の実行を貴び、又出処進退を重んずるが如きは、崎門学者の特色として、浅見・佐藤・三宅の三派を通じて皆然り。初め学祖關齋先生、豪傑の資を以て孔孟程朱の道学を研究し、其の精粹を發揮して之を日本化せしめ、加ふるに所謂垂加神道を以てして、我邦本位の学説を立て〔……〕¹⁰⁾」のごとく、「崎門の学」が「道理の研究」および「道義の実行」を最優先するものとして強調している。本稿では、このように、明治期以降の「崎門」における李退溪論、および主に「教育勅語」の文脈において語り始められた、「熊本実学派」と李退溪との関係をめぐる議論について考察していきたい。

二 近代「崎門」における「道学」という言説と李退溪

1 「崎門」の「道統」と李退溪

李退溪が明治期の近代「崎門」において新たに登場するのは、「崎門」における「道統」の物語においてであった。松山藩儒者の三上是庵(一八一八—一八七六)の門下であった石井周庵¹¹⁾が中心となつて一八八三年六月に「道学協会」が設立され、四年後の

一八七七年十一月に「道義に関する明論確説」が掲載された『道学協会雑誌』創刊号(最終刊七三号)が刊行された。創刊号にみられる「道学協会雑誌発行ノ注意」には、「抑々吾 邦山崎關齋先生出デ特立ノ才ヲ負ヒ、遺経ヲ奉誦玩索シテ遂ニ聖学ノ蘊奥ヲ窮メ、能ク其真正ノ伝ヲ得ラレタリ」、「遂ニ能ク風化ノ万一ヲ裨補シ、道学ヲ無窮に伝フルノ域ニ達センコトヲ庶幾スル而已」とある。石井周庵自らもこの号に「講説・読論語孟子法第一條略解」を寄稿していた。ところが、「道学協会」は一八九一年に「道学遺書」の刊行方針及び、「遺書」に載つた諸先輩墓所一覽をめぐつて¹²⁾分裂し、翌年の八月に『道学雑誌』(発行者は周庵から池田謙蔵となつた。最終刊は六三号)と名を改めて刊行された。その間、一八九一年三月に『道学遺書』(最終刊は一六号)が刊行され、『孤松全稿』が第一巻として選ばれている。『孤松全稿』は、もともと江戸中後期の「崎門」であり「上総道学の大家」と称された稲葉黙齋(一七三二—一七九九)が記したものを、門人の大木丹二(忠篤、一七六五—一八二七)が一八二七年(文政十年)頃に編纂したものである。¹³⁾この『孤松全稿』(巻二)には次のような文章がある。

朝鮮ノ李退溪ハ朱子ノ道統ナリ。朱子ノ訓ニ只管ニ從テ分村朱子ノ規模範圍ヲ越ヘズ。小成ノ朱子也。薛文靖モ真ニ朱子以後ノ一人也。明ノ方孝孺タシカニ道統ナリト直方ノ云ヘリ。靖

献遺言ニ載リタリトテ一節義ノ士トバカリ思フベカラス。

ここでは、特に李退溪について「朱子ノ道統」であり「小成ノ朱子」と述べられている。朱子から李退溪へ、そして明代の薛文靖と方孝孺（一三五七―一四〇二）に至る「道統の伝」が改めて強調されているのである。また同時に、その「道統の伝」が江戸の山崎闇齋、佐藤直方（一六五〇―一七一九）のような「崎門」によって今日まで受け継がれてきたことが示されている。一八九一年に『孤松全稿』を『道学遺書』の第一巻に記したのは、「道統の伝」を、「道学」という言説によって再び具現化しようとしていた表れである。これより前の一八八七年に刊行された芳賀高重編『道学読書要覧』においても、黙齋と『孤松全稿』に関連する内容が数箇所みられる。そこには「道学読書」の対象として、李退溪の『朱子書節要』および『自省録』、そして『李退溪書抄』が挙げられている。『道学読書要覧』の末尾に付されている「付和漢道統聖賢年代概表」には、唯一の「朝鮮人」儒者として、李退溪の生没年が記されていた。ただし、そこに「和漢道統聖賢」と表記されていないことは注目に値する。

松山藩士出身で、後に「道学協会」の幹事および『道学雑誌』の発行者となる池田謙蔵（溪水、一八四四―一九二二）は、一九〇〇年に『道義哲学図解』全三巻（道学館）を出版した。近代日本におい

て、「道義」に「哲学」という西洋由来の学問の翻訳語を結びつけた「道義哲学」という用語が登場したのは、この『道義哲学図解』が初めてである。とりわけ、「道義哲学図解序」には「是東洋理学之淵源、道義之教法。所由出也¹⁾」との文章がみられることは特筆される。

2 『日本道学淵源録』における「道学」の再生産」と李退溪

幕末より明治期にかけての「崎門」の出版活動の中でもっとも注目すべき文献は、『日本道学淵源録』（以下、『淵源録』と略記）であろう。日本政治思想史研究者の丸山眞男（一九一四―一九九六）は、この『淵源録』について、次のように述べている。

闇齋学派の人名別百科辞典ともいべき『日本道学淵源録』（初名『本朝道学淵源録』、大塚観潤・千手旭山編校）が、「統録」とあわせて七巻として成ったのが天保十三年（一八四二年）であり、月田夢齋・楠本端山を経て、明治三十三年（一九〇〇年）に、端山の弟の碩水と、嗣子君翔によってさらに「統録増補」（第二巻）が行われ、岡直養が全体を再編輯し併せて十一巻を活字刊行したのが、実に昭和九年（一九三四年）であった、という事実は象徴的である。『淵源録』〔……〕の天保版の序に「擬之於伊洛淵源之録」とあることによってその意図が窺

われよう。ここでも「雖純奉朱学不入門者不録」という編輯方針が貫かれた。程子「道統の伝」はこうして闇齋派の「道学」によつて、いわば二重に道統化されて脈々と昭和に至つたわけである。¹⁵⁾〔傍点は原文〕

また、日本思想史研究者の子安宣邦（一九三三—）も、こう指摘している。

朱子「道学」の十七世紀日本における再構成の学としての崎門学は、まさしく日本「道学」の系譜を開くものである。そして崎門学の展開、あるいはその学統の内在的な追跡の学は常に「道学」の再生産としてなされていくし、また「道学」の再生産たらざるをえない。闇齋以来の崎門学の展開を辿る楠本端山の『日本道学淵源録』は「道学」の再生産の系譜を示し、近代の崎門学の継承は「道学協会」を結成する形でなされる。¹⁶⁾

本節ではこうした指摘を踏まえながら、主に『淵源録』上の「程子「道統の伝」、すなわち「闇齋派の「道学」」における〈二重の道統化〉において、李退溪の存在が如何なる位置を占めているのかについて考察する。まず『淵源録』における、浅見綱齋（一六五二—一七二二）および三宅尚齋（一六六一—一七四一）と並び崎門の三

傑と称される佐藤直方（一六五〇—一七一九）が一七〇〇年（元禄一三年）九月一日に記した「佐藤直方の討論筆記」（『輶蔵録』巻二）には、次のようにある。

或ひと敬義先生の出処を予に問ふ。予之に応へて竊に謂へらく、堯舜以来、道学相伝へて孔孟に至る。孔孟の後、秦漢隋唐、其の学伝はらず。宋の周程張朱に至つて其の統を接ぎ、而して道学復世に明らかかなり。朱門の黄勉齋、蔡九峯は、実に其の伝を得たり。其の余は蓋し聞ゆるなし。元明の間、儒を以て名ある者、枚挙すべからず。而して其の聖学の門牆を窺ふに至つては、即ち方孝孺薛文靖、此の二人のみ。朝鮮の李退溪は東夷の産にして、中国の道を悦び、孔孟を尊び、程朱を宗とす。而して其の学識の造る所、大いに元明諸儒の儔に非ず。我が邦中古儒道を信ず。而して王公より以下、学ぶ者も亦衆し。然れども聖賢道学の義の如きは、即ち尚未だ嘗て其の説あるを知らざるなり。朱書の我が邦に來り、数百年の久しき、之を読む者、少しと為さず。而して其の道学の正義を發明し、万世不易の定準なるを知る者は、未だ其の人を聞かず。近世、山崎敬義先生朱子を尊信し、其の書に得たり。而して博文の富、議論の正、実に我が邦儒学正派の首倡なり。其の著す所の書世に行はる。読者深く其の意に達すれば、即ち先生の道学進為の方を發揮し、

学者をして従ふ所に惑はざらしむるを識らん。¹⁷⁾

ここでは、堯舜以来、孔孟より宋の朱子に至るまでの中国における壮大な「道統の伝」が物語られている。しかし元・明代に至ると、その「聖学」が、ただ方孝孺と薛文靖の二人によつてかろうじて命脈を維持できたと説明される。そうした状況の中で、「朝鮮の李退溪は東夷の座にして、〔……〕其の学識の造る所、大いに元明諸儒の儔」ではない存在として位置づけられるのである。こうした「程朱を宗とす」る「道学」の系譜上において目立つ李退溪の学問を收容した閩齋は「我が邦儒学正派の首倡」たる存在になったという。中国における「道統の伝」の系譜は「朝鮮の李退溪」を経て日本（江戸）に伝わったのであり、これこそが「日本道学淵源」であるというのである。また、稲葉黙齋の父である稲葉迂齋（二八六四—一七六〇）に師事した村士一齋（玉水、一七二九—一七七六）¹⁸⁾に学んだ上総飯野藩士の服部栗齋（保命、一七三六—一八〇〇）もまた、「閩齋先生は吾が邦道学の嚆矢」とし、「閩齋の朱門以下元明諸儒に於ける、取る所薛李〔薛文靖と李退溪を意味〕の二人に過ぎず、其の論説に至つては、薛李と雖も時に亦従違するは何ぞや」と述べている。さらに三宅尚齋についての箇所においては「其の山崎翁に於ける、以て為へらく、朱子以後の一人なり。薛文靖、丘瓊山、李退溪は皆其の下にありと。浅見佐藤〔浅見綱齋と佐藤直方を意味〕二公を

称して曰く、翁の門人に其の右に出づるものなし。直方は性質英敏翁に似たり。安政〔浅見綱齋を意味〕は學術精密翁に似たり。二生を合すれば、翁に次ぐべし」と¹⁹⁾という文章もみられる。朝鮮通信使の「製述官朴学士に与ふるの書」（卷之四）には、「独り閩齋山崎先生を推して儒宗と為す。識者号して日本の朱子と称す」とし、「朱先生の後、道を知る者は、明の薛文靖、胡敬齋、貴国の李退溪是なりと。故に吾が党の学者、呼んで三録と称する者は、読書録、居業録、自省録是なり」と記され、留守友信（希齋、一七〇五—一七六五）の「済庵李書記に与ふるの書」（卷之四）には「日本国大阪の留守友信、書を朝鮮国の書記足下に奉ず」とされ、次のように記されている。

嘗て之を聞く、退溪先生、箕範の伝を失することを憂ふと。歴世茫茫嘆ずべきなり。夫れ近世明儒著述の書、吾が邦に伝はる者、汗牛充棟、勝げて数ふべからず。而して斯道の羽翼と為すに足る者なし。況んや易範の妙に於てをや。又之を聞く。貴邦、退溪先生より前に、趙静庵、金寒暄、鄭一蠹、李晦齋あり。退溪先生より後に、鄭寒岡、李栗谷、成牛溪、尹明齋あり。此の諸先生は、茲に道学を倡明し、国に著龜し世に標準す。若し語の箕範に及ぶ者あらば、即ち亦幸に伝ふるを吝む無れ。特む所の者は書、致す所の者は心、願はくは足下垂察せよ。²⁰⁾

また、村士二齋について記した、「寒泉岡田博士の退溪書抄の跋」よりの抜粋である「村士一齋先生」（巻之五）においては、「嘗て退溪李氏を称して曰く、吾朱子の道を其の書に得たりと。其の之を尊奉するや、特に諸子に異なる。其の全集に即き、学に切なる者日に用ふる者を抄出して十巻と為し、命じて退溪書抄と曰ふ。猶退溪氏に節要の作あるがごときなり」と記されている。李退溪をして『朱子書節要』を著わさせたと同様に、村士に『李退溪書抄』十巻を編ませたのである。

ところで肥前平戸藩（長崎県）の儒者楠本碩水（孚嘉、一八三二—一九一六）の編集にかかる『淵源統録増補巻下』の「月田蒙齋伝」には、次のような文章がみられる。

天逸子曰く、寛保延享の間、肥後に隠君子あり。大塚退野先生と曰ふ。壯歳、李退溪の朱子書節要を読み、潛心之を求め、信じて学ぶ者四十年。毎に世の学者の徒に居敬窮理の朱学たるを知り、而して其の用功の実に至つては、即ち分寸も相近き者あらざるを慨く。後五六十年を経て、蒙齋先生其の郷に生る。刻苦勉励、実理の本原を見るあり、而して本領一段の功夫亦深く得る所あり。蓋し亦予章延平の流なるか。嗚呼二先生、見道の深淺、成徳の大小、敢へて妄に議せずと雖も、然れども要するに皆一代の純儒たり。而して世の之を知る者鮮し。故に併せ

て論じ、以て後の学者を待つ。²⁸⁾

楠本碩水は次章で詳述する長兄楠本端山（一八二八—一八八三）とともに肥後熊本藩長洲の月田蒙齋（一八〇七—一八六六）より「崎門」の朱子学を学んだが、この蒙齋は三宅尚齋一派の「崎門学」に属する儒者であった。一八九一年の「道学協会」発足前に端山は世を去つており、碩水も、書簡で次のように述べて、あえて「道学協会」と関わることはなかった。

おつしやる通り崎門学の流弊については私も同じ意見であります。関東筋の崎門学と申すものは、多くは佐藤直方の一派で、稲葉黙齋に至つては、狂者のような性質を持つており、その学問は異端に墮るを免れません。「……」私も道学協会には加入しておりません。門人の中に入会しているものもありますので、黙齋の『孤松全稿』も時々一覽いたしました。有益な書だとは思われません。しかも文章が拙陋で、意味の通らぬところも少なくありません。くどくどと論じていますが、厭わしいものです。²⁹⁾〔原文は候文〕

儒学研究者の難波征男（一九四五—）も次のように指摘している。

碩水によれば、儒教の道統は、宋代の程朱を経て、日本の山崎闇斎によってその命脈が保持されており、現在、その闇斎の学は蒙斎によって正しく伝承されている。「……」朱子学の真髓を尊重する崎門学は、徳性の存養を窮理の根本と考えたが、彼らの多くは、根本的一理をある固定的なものとする偏狭な認識に陥っていた。そのために彼らは、個別的事態が多様な展開を示しつつ、しかもめまぐるしく変化する客観界の動向に、柔軟に対応する主体的能力を喪失し、頑迷固陋になっていた。そのような状況の中で、蒙斎はひとり確固とした主体性を保持して、この歴史的動態に彼なりの方法で対処していた。碩水の目に蒙斎はこのように映ったのである。³⁰⁾

碩水は上記の引用文において、師の蒙斎とともに長年にわたって『朱子書節要』をはじめとする李退溪の学問を信奉した肥後熊本藩の「隠君子」大塚退野（一六七八一—一七五〇）を「一代の純儒」と称する。とりわけ碩水は、李退溪に対しても「闇斎は能く朱子の学を究め、退溪はよく朱子の道を学んでいる。皆元明諸儒の及ばないところである（闇斎即能究朱子之学退溪即能学朱子之道。皆非元明諸儒所及也）」³¹⁾、「退溪以前は退溪に折衷せられ、退溪以後はこれに出るものはいない（朝鮮諸儒、退溪以前折衷於退溪、退溪以後無出於退溪之外者）」などと高く評価している。³²⁾これに関連して、中国哲学研究

者の岡田武彦（一九〇八一—二〇〇四）は、こう指摘する。

碩水旧蔵の図書目録に李滉注の『朱子行状』が記されており、『朱子書節要』に至っては、明暦二年（一六五六）刊本と、黒岩慈庵点の宝永六年（一七〇九）刊、および写本の二本が記されている。端山の家には朝鮮刊の『李退溪文集』『読集』『外集』および『退溪年譜』『退溪行状』『別集』の写本が伝わっており、他に佐藤一斎表書の『退溪西銘考証講義』があった。注意すべきことは、師伝なくして退溪学を篤信した熊本実学派の祖、大塚退野の手批本、『朱子書節要』が伝わっていることである。右の書籍が全部端山のときに所蔵せられていたか否かは定かでないが、これによって端山もまた退溪の書に眼を通しており、また楠門学が熊本実学派と直接間接に関係があったことが明白になるであろう。³⁴⁾

「直接退溪学を受用して独自の発展を遂げたのは熊本実学派であるが、楠本もここに述べるように崎門に従い、かつ熊本実学派と接触があった関係上、退溪学と密接なかわりがあった」という岡田の考え方には賛同できる部分とできない部分がある。ここで岡田言う「熊本実学派」とは、主に横井小楠（一八〇九—一八六九）と元田永孚を指している。岡田は、「熊本実学派」としての彼らの学

問の源泉を李退溪の影響を受けた大塚退野の「朱子学」に見出している。横井や元田らは一八四一年（天保十二年）に「熊本実学党」を確かに結成したものの、彼らが熊本において実際に大塚の学問を継承する形で「熊本実学」という学問流派を形成しようと考えていたかどうかは疑問である。また李退溪についての言及は、横井の場合、第三章で述べるように、二箇所にとどまっております、元田の著作にも二箇所のみである。そのうえ、大塚と横井・元田に師承関係を見出したとしても、それにはかなりの時間的な隔たりがある。「崎門」の楠本碩水は自らが「一代の純儒」と呼んだ大塚退野のみならず李退溪の学問にも関心を示したのであるが、横井や元田のようならず「熊本実学派」と接触があった関係上、退溪学と密接なかかわりがあった」と断定することはできない。³⁷ 楠本碩水は「熊本実学党」がその勢力拡大に挫折した一八四七年（弘化元年）後の一八五四年（安政元年）に横井と面会しているものの、元田に会った記録は管見の限り見付からない。それは岡田が「一般に熊本実学派は崎門には批判的」であり、「小楠も闇齋の学を非として、「山崎学講義読の学者にて一切心術工夫無之、外馳之大病甚敷」といった」と述べているとおりである。³⁸

このように、「楠門学」（楠本端山と碩水の学門）が「熊本実学派」と直接間接に関係があった」というのは、岡田による事後的・恣意的な見方ではないだろうか。むしろ、李退溪に関心を示した碩水を

「接点」に、後に詳述するように、徳富蘇峰（猪一郎、一八六三—一九五七）や阿部吉雄らの李退溪論のような闇齋学派と元田永孚らの「熊本実学派」の双方より李退溪を論じる構造をつくったのではないか。「熊本実学派」の横井小楠と元田の名は、碩水が一九〇三年に編集・刊行した『崎門学脈系譜』には含まれていないが、一九四〇年に碩水の門人岡直養（なおか、一八六四—一九四九）が訂補・刊行した『崎門学脈系譜』（晴心堂）の岡直養編録「崎門学脈系譜付録一」にはみられる。³⁹ まさにここに、山崎闇齋および元田永孚の両者がともに李退溪より影響を受けたという李退溪研究の端緒がみえてくる。

三 「崎門」と「熊本実学派」

肥後熊本藩出身の徳富蘇峰は一九三八年三月四日に脱稿した『山崎闇齋と其門流』「序」にて、こう述べている。

世間では横井小楠を目して、陽明学派と称するも、彼は本来山崎学派にして、小学、近思録、大学或門、中庸或門輯略などは、彼自ら読み、且つ門人にも課した。而して其の門人たる吾が父及び其弟の如きも、闇齋を崇敬するの余り、闇齋の名たる敬義を分ち用ゐ、一敬、一義と称してゐた程であつた。又小楠

の学友長岡是容、元田永孚の如きも、亦然りであつた。固より彼等は永く崎門の牆下には立たなかつたが、其の門戸は是れに由つた。されば元田永孚の 明治天皇に御進講申上げたる経書の如きも、彼が如何に山崎学に負ふところの多大であつたかは、今更之をくたくしく説明する迄もあるまい。若し地下の闇齋先生にして知るあらば、吾道の明治聖代に際して、大いに世に明らかにしたりたるを、定めて思ひ掛けなき幸運として感謝したのであらう。⁴²⁾

蘇峰はここで熊本藩の儒者であり藩政の改革者でもあつた横井小楠が「本来山崎学派」であり、蘇峰の父である徳富一敬とその弟である一義も「闇齋の名たる敬義を分ち用ゐ」るほど「闇齋を尊敬」していたという。しかのみならず、同じく熊本藩儒者であり横井の知人・門下であつた元田らも、その学問的な「門戸」は「崎門」に「由つた」と述べている。特に、「元田が」明治天皇に御進講申上げたる経書の如きも「実に「山崎学に負ふところの多大であつた」との言及は崎門と、いわゆる「熊本実学派」の学問的「結合」を事後的に図ろうとするナラティブに他ならない。上掲の『崎門学派系譜』「崎門学派系譜付録一」に横井と元田らの名がみえるのもこうした動きと連動している。だが横井のみならず、元田も「明治天皇に御進講申上げたる経書の如きも山崎学に負ふところの多大であつ

たか」は別の問題であらう。

「熊本実学派」とは、肥後熊本藩の「朱子学者」大塚退野との「師承関係」にあるとされる横井と元田らを指す。再言すれば、彼らの学問的指向のあり方について論ずる後世の研究者の議論には、彼らが大家退野と「師承関係」であるとの了解がみられるのである。李退溪の「影響」を受けた大家退野との「師承関係」から照らされる横井と元田の「熊本実学」形成の物語とは、「崎門」にみられるような、ある種の「道統の物語」として機能しているのではなからうか。それは結果的に、「朱子学者」山崎闇齋およびその門下「崎門」との「対抗関係」において語られる、明治維新を担つた肥後熊本藩から発信される「朱子学」をめぐる事後的な「道統の物語」なのである。ところで、横井小楠が李退溪などの学問に共鳴した例として挙げられるのが、横井小楠が久留米藩の儒者本庄一郎に宛てた書簡（一八四九「嘉永二年」）中の文章である。

明一代之真儒薛文靖と奉存候。其外朝鮮之李退溪有之、退溪却て又文靖之上に出候様に相見古今絶無（胡敬齋亦一醇儒なるべし）之真儒は朱子以後此二賢に止候。故に読書録・自省録等之書は程朱之書同様に学者可心得奉存候（読書録・自省録の類初学の人に読しむる事を不願。其説重て述ぶべし）。⁴³⁾

このような横井小楠の李退溪に対するわずかな言及は、それまでの崎門によるものとはほぼ同様な常套句である。引用文をみるかぎり、横井小楠による李退溪の読みは『自省録』に止まっている。肥後熊本藩の儒者であった大塚退野に関しても、小楠は次のように退野が李退溪の『自省録』を通して「程朱之学」に入門したと伝えるのである。

名丹右衛門、初陽明を学び専心を修養いたし良知を見るが如に是あり候。然れ共聖經に引合て平易ならず疑ひ思ひ候うちに、李退溪の自省録を見候て程朱之学の意味を曉り、年二十八にして脱然と陽明之学を絶ち程朱之学に入り申候。其の曉り候處は格致之訓にて有之候。退野天資の高のみならず修養の力格別に有之、知識甚明に御座候間治国之道尤以会得いたし候。⁴⁴

ところで、この書簡において、横井小楠は「功勲莫大に奉存候」としながらも、「惟恨むらくは此学を世に明にするに主となり候故自家修養之本地恐は薄有之、所謂専用力於内とは少しく相替り、氣癖〔……〕荒々敷相見へ其門人も又此弊習有之候」とのごとく、山崎闇齋をその「門人」とともに批判する。この文章をみる限り、横井小楠は山崎闇齋およびその「崎門」とは一線を画していることが知られる。一方、楠本端山の孫であり九州帝国大学中国哲学教授で

あつた楠本正継（一八九六—一九六三）は「小楠や東野が退野に対する敬慕の情を持つてゐたことは争へない」「退野並びにその門下の思想が明かにされ、ば此間の事情は自ら分つて来るに相違ない」と述べている。楠本は、さらに、「小楠実学は遂に退野を超え、程朱などの宋儒をも超え、天命を畏れて天工を広むる堯舜三代の立場から、西洋功利の技術功用をも尽して之を包み、その転換を図る大の見地に到つたといはねばならぬ」と指摘する。

また、横井小楠とともに「熊本実学党」の一員でありながら、岡の『崎門学脈系譜』『崎門学脈系譜一』において崎門の一儒者とみなされていた元田永孚は、自らの学問的な位置と関連してこう述べる。

我退翁、退溪を信じ程朱の学を伝えられて、孔孟の道を窺ひ得られしも、其入處の跡を見れば、信心の深きよりひたもの内に求めて下学致され、終に本領を会得したるに可有之、省齋も退翁の学を得られて、入處の跡は下学為己の四字に可有候。⁴⁵

慶長偃武以来の儒者、熊沢先儒道徳経緯千載の一人、此外には退野大塚子の学は、朝鮮の李退溪より伝へ、程朱の真髓を会して孔子仁の旨を得たり。其門人深淵平野子は程易の道徳に深く伊尹の志を体せり。此三子の学脈、真に堯舜孔孟の心法を得

て、後世に師表となすべきなり。⁴⁸⁾

堯舜ノ道孔子ノ学其正大公明真ノ実学ニシテ世ノ人之ヲ知ル者鮮シ俗儒者記誦詞章ニ拘シテ修己治人ノ工夫ヲ知ラス政ニ預ル者ハ法制禁令ノ末ヲ把持シテ治国安民ノ大道ヲ知ラス漢儒以後謬伝シテ其道ヲ失ヒ宋ニ至リ周程張朱初テ千載不伝ノ学ヲ得テ而シテ後來能ク其真伝ヲ得ル者幾稀ナリ吾邦ノ学古昔ハ論セズ慶長以後儒者輩出スト雖トモ修己治人道徳経綸真ニ道ヲ学ヒ得タルハ熊沢先生ニシテ其後ハ吾藩ノ先輩大塚退野平野深淵ニ先生ノミ。⁴⁹⁾

上記の引用文の執筆時期は、それぞれ一八四七年、一八七〇年、一八七八年と時間的な隔たりがある。一つ目と二つ目の引用文中にみられた李退溪の名は三つ目の引用文にはみられない。ここで、元田永孚が述べているのは、「正大公明真ノ実学」としての「堯舜ノ道孔子ノ学」を受け継いだのは宋代の周濂溪、程明道、程伊川、張横渠、朱子であり、「吾邦」日本においては江戸時代初期の陽明学者熊沢蕃山（一六一九—一六九二）、大塚退野とその弟子の平野深淵のみであるということである。つまり、元田永孚が属した「熊本実学」とは、こうした「道統」を継承するものとして存在するとの主張である。元田は、朝鮮の李退溪を「堯舜ノ道孔子ノ学」としての

中国の「道統」を継ぐ存在とは述べておらず、朝鮮から李退溪を含む「朱子学」が導入され「儒者輩出ス」というのみである。そこには、中国における「道統」と日本のそれとを繋ぐ朝鮮の儒者としての李退溪は登場しないのである。

一方、これまで元田永孚と李退溪とを学問的に関連づける根拠として、「程朱の学は朝鮮の李退溪に伝はり、退野先生その所撰の朱子書節要を読み超然として得る所あり。吾れ今退野の学を伝へて之を今上天皇に奉せり」という元田の「発言」が取り上げられてきた。この初出は内田周平が一八九七年六月に発表した文章である。

元田氏は斯く退野及び成斎の学を信じて世に行はんとせり、去れば程朱学に深入せることに於ては退野派迥に藩学に超へたり。今日の我日本にも程朱の学は絶へず行はれて畏くも教育勅語の中にもこもり、勅語は国体説と道徳論を並べ挙げられたれども、其道徳の解釈は、程朱の説に異なることなし。元田サンの言に程朱の学は朝鮮の李退溪に伝はり、退野先生その所撰の朱子書節要を読み超然として得る所あり。吾れ今退野の学を伝へて之を 今上天皇に奉せりと、実に吾人の尊信する程朱学は、今日實際世に行はるゝなり。⁵⁰⁾

ここでの元田は、まさに、一八九〇年に発布された「教育勅語」

の起草者の一人である。内田は上掲の引用文中の元田の「発言」の根拠として、ただ「元田サンの言に」と述べているのみである。元田の「発言」が継承されるに際して主な役割を果たした朝鮮総督府嘱託の松田甲（一八六四—一九四五）もまた、この内田の「元田サンの言に」を元田「発言」の根拠にしている。⁶¹だが、元田にとつて、上記の「勅語」の「道德の解釈」上を中心とする「程朱学」とは、あくまで李退溪の影響を受けた「熊本実学」の祖とされる「退野の学」であろう。「元田サンの言」と「教育勅語」起草には、直接的な関わりがあるのであるか。いずれにせよ、「元田サンの言」を事実と受け入れることを前提にした場合でも、元田の著作の中において李退溪について言及された箇所は前述の二箇所を含めて三箇所にとどまる。

ところで、内田が東洋大学講師時代の一九〇八年（明治四一年）一月に発表した「元田東野先生扁字跋」には、このように記されている。

元田東野先生。侍講今上陛下。殆二十年。曾奉旨草教育勅語。学徳之高。海内仰望。周平欲一謁於門牆。特以貴賤懸絶未敢也。^{二十}丁亥之秋。凶書頭井上君毅以礼求見周平。君与先生。同籍熊本同官宮中。因請為介。而荏苒度年。未能通刺於門下。一朝聞其薨。悔恨靡及矣。後教授第五高等学校寓熊本五年。得先生所著

闕之。始知其学出於同郷大塚退野。退野誦李退溪之書。崇信程朱。能德化其郷。先生奉其学能輔翼陛下。一德之教。敷于四海。其功可謂偉矣。此扁先生為郷人渡辺某書者。以德報德。四大字。筆態適美。黑彩煥發。其子断雄在高等学校。受周平教。因以贈焉。嗚呼周平久景慕先生。而不能見。今对此扁。猶見先生也。頃者装潢揭諸楣間。因跋一言。并及其学徳淵源如此。明治戊申王正月。内田周平謹識。⁶²（傍点は原文）

この引用の冒頭にみえるように、元田は彼自身と同じく肥後熊本藩出身である井上毅（一八四四—一八九五）とともに「教育勅語」の起草に直接関わった。しかし、ここで述べられている元田の役割は、「陛下一徳之教」を輔翼するのみである。内田のこの文章をみると元田の「発言」がそのまま元田の「教育勅語」の起草のあり方を左右したと捉えるには無理があることが知られよう。元田が宮内省へ出仕し明治天皇の侍講となつたのは一八七一年であり、明治天皇への進講を行いはじめたのは一八七二年のことである。その後、井上毅と協力して「教育勅語」の起草に関わつたのが一八九〇年（同年一〇月三〇日に発布）のことであつた。最初の進講から「教育勅語」の発布までには、時間的な隔たりがある。内田の「元田東野先生扁字跋」が発表されてまもなく、これに関心を示した朝鮮（大韓帝国期）の反応が、姜荃「片紙感人」（『大韓学会月報』第七号、

一九〇八年九月二五日)、そして、「退溪先生の學イ(退溪先生の學が)行于日本者久矣」(『西北学会月報』第二二号、一九〇九年五月一日)である。しかし、これらは、朱子とともに日本の儒学界に占める李退溪の存在を強調しているにもかかわらず、内田の文章を「教育勅語」との関わりで読みとつてはいない。

ところで、阿部吉雄は『李退溪』(一九四四年)および『日本の朱子学と朝鮮』(一九六五年)において元田の「発言」が『東野手録』にあるとしている。後者についていえば、それは実際には、『東野手録』ではなく、松田甲より引用したものである。⁵³ この『東野手録』については、細川家編纂所編『改訂 肥後藩国事史料』巻一〇に「東塾永孚子中手録」(抄略)が載せられており、「東塾永孚子中手録」が『東野手録』であることが推測される。しかし興味深いことに、この「東塾永孚子中手録」には元田永孚の「発言」は見当たらない。「李退溪没後三百六十年記念」⁵⁴として一九三〇年三月に朝鮮総督府から出版された『日鮮史話』第六編において松田は元田の「発言」の典拠を元田の『進講録』に求めているが、実際には『進講録』においても元田の「発言」は見当たらない。『東野手録』が実存したと仮定しても、それは元田が明治天皇への進講に臨んで書かれたものであろう。内田の言う「元田東野先生扁字跋」というのも、おそらくは、『東野手録』を指す可能性があるためである。しかし、松田甲は、こうした元田の「発言」を、「大に融和資料とな

るべきもの」、「教化資料」として「教育勅語」の文脈で解釈した。

予が李退溪及び大塚退野と関連して、彼れを最も伝ふべしと云ふのは、彼れが宮中の進講につきて、自ら次の如く曰ひたる事である。

程朱の学は朝鮮の李退溪に伝はり、退野先生その所撰の朱子書節要を読み、超然として得る所あり、吾れ今退野の学を伝へて之れを、今上皇帝に奉ぜり。

今上皇帝とは即ち、明治天皇を申したのである。此の言に由りても、退溪を尊信せる事は勿論、東野の学も結局退溪に負う所ありしを推知せらるゝ。実に退溪の撰する『朱子学節要』は、彼れの『自省録』と、ともに、日本の教化に貢献せる甚だ大なるものであつた。前にも述べたる如く、東野は日本国民として、常に服膺すべき教育勅語の大勲者である。而して其の学説に於て、朱子——李退溪——元田永孚と繋かれるを稽ふる時は、内鮮関係の深且大なるに想到せざるを得ない。言ふまでも無く、教育勅語は、内鮮いづれの学校にも掲げられてある。之れを其の起草者たる東野は退溪の尊信者であり、又退溪は朝鮮の人々の尊敬する儒学の泰斗たる事を弁まへて奉読する時は、其処に明治天皇の大御心も偲ばれて無量の感が起きるのである。内鮮同化と云ひ内鮮融和と云ふ事に就ては、能く此等の関係を研

究し且つ之れを永久に持続する必要があると思ふ。但、茲に注意すべきは、日本の学者は、朱子の説にせよ、退溪の説にせよ、決してこれに盲従せず、必ず先づ国体に鑑み、之れに順応する如く活用して、以て皇威の宣揚、邦運の隆興、士気の振作に供した事である。「……」尚ほ繰り返して曰ふ、世には 明治天皇の教育勅語を元田永孚が命を奉じて草したることを知れる人は甚だ多い、併し東野の李退溪の学を尊信したることを知れる人は甚だ少い。予は此の事の遍ねく知らるゝに至らんことを希望する。殊に朝鮮の人、又朝鮮に居る内地人にして知るあらば、大に融和資料となるべきものと思ふのである。⁵⁵⁾〔傍点は原文〕

実に退溪は徳川幕府の創業時代より始まり、王政維新後の大正時代に至るまで、殆んど三百年に亘り、日本に於て善き知己を得たものである。殊に明治天皇の侍講として聖旨を奉じ教育勅語を起草したる元田永孚の退溪を尊信せる如き、又其の生国肥後の先輩が退溪を尊信せるは、最も顕著なる事実なるが、予は曾て他の題目のもとに述べたるを以て本稿には省略した。言ふまでも無く学問を以て政争の具に供するを嫌厭せる退溪としては日本の醇儒に尊信せられしことを必ずや地下に感激し居るものと思はるゝ。今や内鮮制度共通の下に子弟を教育し、殊に世運の推移に伴ひ最も道德の涵養を重んずる際、往時日本の朱

子学者の退溪を讃美せる事跡は、決して等閑に付すべきものにあらず宜しく教化資料として宣伝するの要ありと信ずる（昭和四年十一月稿）。⁵⁶⁾

松田は、「程朱の学は朝鮮の李退溪に伝はり、退野先生その所撰の朱子書節要を読み超然として得る所あり」という元田の「発言」を、植民地朝鮮における「教育勅語」施行上の「融和資料」として捉えているが、このような捉え方はなるほど、元田の「発言」をめぐる内田の「元田東野先生扁字跋」における文脈とは異なる。繰り返せば、内田は「吾れ今退野の学を伝へて之を 今上天皇に奉せり」とのとき元田の「発言」を伝えているだけなのである。ところが、松田甲にある元田の「発言」の捉え方は、阿部吉雄の『李退溪』における李退溪像へと連続していく。

四 「教育勅語」の文脈における李退溪論と「道義」

『李退溪』の「序説」において、阿部吉雄は、次のように述べている。

明治教育界の元勳、元田永孚も深く李退溪を研究しその思想内容を兼取してゐる。しかしながら世に往々元田の学は即ち退

溪の学であると唱ふる者もあるが、誤これより甚だしきはない。元田永孚も闇齋と同様、深く退溪の所説と共鳴する所があつたが、皇国の道によつてこれを高く止揚してゐる厳然たる事実を忘れてはならない。山崎闇齋と云ひ、元田永孚と云ひ、近世及び近代初期の教育界の大人物であり、深く皇道を説き出した人であるが、期せずして退溪を研究してゐることは看過してはならないことである。⁵⁷⁾

阿部はここで元田の学を退溪の学と捉えるのは誤りであると明確に言つている。第三章で論じたように、中国の「堯舜ノ道孔子ノ学」から「周程張朱」を経て日本の熊沢蕃山と肥後熊本藩の「大塚退野平野深淵二先生」に至る「道統」の物語の中で、李退溪の存在は明確な位置を占めてはいない。阿部は元田が「皇国の道によつてこれを高く止揚してゐる」と述べているが、この指摘は元田の『進講録』をみても明らかである。元田は明治天皇の前で『論語』を進講する際、「支那にて云へば、堯舜の道、孔孟の学と云ふと雖、本邦にて云へば我 神聖の道、我道德学と云ふべきなり」と宣言しているからである。⁵⁸⁾ また元田はその後の一八八一年一二月からの『論語講義』においても「此論語ノ書孔子ノ道ニ於テハ支那ノ書ニシテ我朝ノ伝書ナリ孔子ノ道ニシテ我日本人ノ道ナリ」という。すなわち「我 神聖の道、我道德学」とは「孔子ノ道ニシテ我日本人ノ

道」なのである。それは「道義を守テ国家ニ忠義を尽」すものに他ならない。元田自らは「孔子ノ道ヲ信シテ自分此道義ヲ実践セントノ志ヨリ此書ヲ講シ此書ノ義ヲ明カニセラル」といつているが、『論語』が「人倫道義ノ学」というのはこの意味においてである⁵⁹⁾。元田にあつて「進講」というのはまさにそうした「道義の輔翼」⁶⁰⁾の行為に他ならないのである。

五 「東亜の朱子学東漸史上」の李退溪——むすびに代えて

阿部吉雄は京城帝国大学から東京大学に復帰した後の一九六五年に大作『日本朱子学と朝鮮』を公刊した。これまで論じてきたように、阿部は李退溪研究を、早い時期から山崎闇齋研究との関係で論じてきた。すなわち、阿部は、以下のように、一九三〇年代初期より盛んに叫ばれた「日本精神」論と「国体論大義名分論」の中で新たに登場した山崎闇齋を自らの研究の出発点としているのである。

闇齋学の生命は彼の特色多い人格を通して強烈に発現された日本精神にあり、国体論大義名分論にあることは云ふまでもない〔……〕。⁶¹⁾

闇齋の精神を通して復活された朱子学は、更らに一層簡易化

され純化され内面化され、そして日本化されたものとして現はれた。由来元明以後に於ける朱子学の煩瑣化に対する簡易化の運動と朱子への復帰運動は既に明初に於いて学界の一部に台頭してゐる。かの薛敬軒は其主要人物であつたが更らに朝鮮の李退溪もその精神を發揮してゐる。従つて此二人に最も私淑した闇齋は一面より見れば此等の運動を發展せしめた者と思得るのであるが、此の問題は学統と学説の問題に属するものであるから稿を改めて論じなければならない。⁶⁴

一九四一年に京城帝国大学法文学部助教として赴任する阿部は、これを契機として、闇齋との「思想的血縁関係」という観点から李退溪研究を本格的に始めていく。一九四四年の『李退溪』刊行がその主な成果である。ところで、『李退溪』には、次のようにある。

退溪先生の思想はやがて間近に山崎元田両先生の思想に通ずるものであることを看過してはならない。即ち端的に言へば、両先生の思想は皇国の道に本づいて孔子や朱子や退溪先生の道義思想を融会し醇化し又止揚したものであつて、此に於いて一般的な仁義道德の教は実に皇国の道の中核とする仁義道德の教として説き出されてゐる。⁶⁵

ここには、近代「崎門」の李退溪論と「熊本実学派」の李退溪をめぐるストーリーが〈折衷〉的に語られている。すなわち、「日本精神」論の文脈で呼び出された山崎闇齋像と、「教育勅語」をめぐる「熊本実学」の最後の「発信者」元田永孚の「発言」とを救い上げるかたちで一九三〇、四〇年代の李退溪言説が現れたのである。徳富蘇峰が「元田永孚の 明治天皇に御進講申し上げたる経書の如きも、彼が如何に山崎学に負ふところの多大であつた」と述べたのは、まさしく近代日本の二つの李退溪言説が〈折衷〉されるものとなる前史といえよう。ただし、阿部の『李退溪』における議論の従来とは異なる特徴は、第四章で論じた元田の「日本道德学」「道義」的な観点からの李退溪像提示から一歩進んで、「道義」「道義哲学」言説が積極的に開陳された点である。阿部によつて「日本教育先哲」として捉えられた李退溪は、帝国日本内の「半島に於ける道学の教祖、道義哲学の創唱者」として登場してくるのである。李退溪は「国体」および「道義」の言説的構成による（日本朱子学の近代）言説成立において欠かせない存在として呼び出されたといえる。阿部はまた、『李退溪』においてこのように述べる。

李退溪の価値は儒教の發生地である支那に於いては遂に認められず、独り我国に於いてのみ認められたと云ふことは興味ある対照をなすものであつて、吾人はこれによつて内鮮は古来、

啻に血縁的、文化的にだけでなく思想的にも特別の関係があつたことを実証することが出来る。と同時に儒教の精髓、真に価値ある思想などは特に我国に於いてのみその価値が認められ、その価値が発揮されてゐることを知らなければならぬ。日本の思想には東洋思想の精髓が包摂され融会されてゐるのであつて、半島第一の哲学も此の様にして早くから撰取されてゐる事実は、茲に改めて世人の注意を喚起しなければならない。⁶⁵

ここで阿部は、「儒教の精髓、真に価値ある思想などは特に我国に於いてのみその価値が認められ、その価値が発揮されてゐる」と強調している。阿部は、「日本の思想」とは「東洋思想の精髓が包摂され融会されてゐる」ものだと考えているのである。つまり、ここからわかることは前近代の中華帝国に代つて近代の新しい帝国として登場しつつあつた帝国「日本の思想」には、「東洋思想の精髓が包摂され融会されてゐる」東洋の「知の帝国主義」⁶⁶としての面目があるということであろう。「半島第一の哲学」者としての李退溪も、「日本教育先哲」の一人として、「東洋思想の精髓」が集大成された「日本の思想」の中に「早くから撰取されてゐる」ということである。阿部が「退溪は東亜の朱子学東漸史上の第一頁を飾るべき人物である」⁶⁸と述べているのはそうした意味においてである。徳富蘇峰は「教育勅語」発布（一八九〇年）四十周年（一九三〇年）に際

し、こう述べている。

此の勅語（教育勅語）は、単に現代及び百世の日本国民に対して、其の向ふ所を指点したるばかりでなく、実に日本帝国本来の面目を完全に描き出したるもの。言ひ換ふれば、日本は国家として道義立国であり、国民として道義国民である極印を捺したるものにして、乃ち之を外にしては、世界に対して、日本帝国の立脚点と、態度とを宣明したるもの。之を内にしては、日本国民の本領、真骨頭を宣示したるもの。此れをしも盛徳大業と云はずんば、何をか盛徳大業と云はむ。⁶⁹

ここには「教育勅語」のように、東洋の「知の帝国主義」として登場した帝国日本が、まさしく〈道義の帝国〉であつたことがはっきりと宣言されている。

阿部が『李退溪』を執筆したのは、一九四二年五月二十九日に第九代朝鮮総督（一九四四年七月二日まで）小磯国昭（一八八〇—一九五〇）が赴任し、「兵站基地」としての「道義朝鮮の確立」が施政方針として定められた時期であつた。一九二八年に「退溪の教育思想」（『慶北の教育』、脱稿は一九二七年）を発表した朴鍾鴻^{パクジョンホン}（一九〇三—一九七六）は、後に、一九五九年より一九六〇年にかけて、「我が師表の李退溪先生」（上・中・下）を発表している。朴は、

ここで李退溪を「永遠に我が民族に道義の師表と」し、その「道義の師表」としての人格と「敬い」の「実践躬行」について論じているが、そこには韓国の「支配エリート」といえる朴による「李退溪」表象を通して、解放後韓国において語りつがれた「道義」言説の根強さを見ることが出来る。一九七〇年一〇月二〇日、ソウル市の南山に、朴正熙（パチヨン）（一九一七—一九七九）の支援のもと、李退溪銅像が建てられた。その銅像の背後には、まさに朴鍾鴻の筆による碑文がある。そこには、元田永孚の「発言」も忘れられることなく刻み込まれている。

注

- (1) 例えば、「韓日「融和」表象の要求と李退溪」『歴史批評』第八四号、歴史批評社、二〇〇八年八月（韓国語文）、「道義の帝国」論の射程——解放後・戦後における「道義」言説と李退溪』『アジア文化研究』第四二号、国際基督教大学アジア文化研究所、二〇一六年三月など。
- (2) 『李退溪』「はしがき」文教書院、一九四四年、一頁。阿部はまた、李退溪を「半島第一の教学者、道義哲学の創唱者たる李退溪」〔『李退溪』「序説」、八頁）ともいう。
- (3) 『李退溪』「はしがき」、二二頁。
- (4) 『李退溪』「序説」、七頁。
- (5) 『李退溪』「序説」、三頁。
- (6) 阿部吉雄「山崎闇齋と其の教育」、徳川公継宗七十年祝賀記念会編『近世日本の儒学』岩波書店、一九三九年、三四五頁。

- (7) 「山崎闇齋と其の教育」、三五四頁。
- (8) 「山崎闇齋と其の教育」、三五六頁。
- (9) 日本古典学会編『山崎闇齋全集』第三卷「序」へりかん社、一九七八年、二—三頁（一九三七年五月一日に池上幸二郎の筆による）。
- (10) 内田周平「望楠軒諸氏の学風」、伝記学会編『増補』山崎闇齋と其門流』明治書房、一九四三年、一九八頁。
- (11) 木村利武「石井一素翁履歴大要」は、周庵について次のように伝えている。「池田謙蔵氏等と計り、道学協会なるものを組織し、一時は雑誌の発行をも為し、大いに斯学の拡張を計りましたが、資継かずして之を中止して、今に時習学舎と云ふ表札を掲げて、僅々たる諸生を教授して怠らず、卓然として時流の外に挺立して居らるゝは、実に欽慕の至りであります」（田中謙藏撰・池上幸二郎校『石井周庵先生伝』五学叢書第二編「付録」、一九三六年、八頁）。
- (12) 丸山眞男「闇齋学と闇齋学派」『山崎闇齋学派』岩波書店、一九八〇年、六〇四頁。
- (13) 大久保紀子「孤松全稿」について——『黙齋艸』との関係、高島元洋編『近世日本の儒教思想——山崎闇齋学派を中心として』第二分冊 資料編、お茶の水女子大学附属図書館、二〇一二年、六三七頁。
- (14) 『道義哲学図解』（上）『道義哲学図解序』。
- (15) 「闇齋学と闇齋学派」、六〇五頁。
- (16) 『江戸思想史講義』岩波書店、二〇一〇年、三五八頁。
- (17) 便宜上、南一郎『全訳日本道学淵源録』（以下、『全訳』と略述）日本印刷所出版部、一九三七年、三一頁より引用する。『全訳』「論述 凡て十三條」、四七—四八頁。
- (18) 門人には服部栗齋（二七三六—一八〇〇）のほか、岡田寒泉（一七四〇—一八一六）らがいる。
- (19) 『全訳』「論述 凡て十三條」、五〇頁。

- (20) 『全訳』、一二六頁。
- (21) 『全訳』、二七二頁。
- (22) 『全訳』、二七三頁。
- (23) 『全訳』、二七四頁。
- (24) 『全訳』、二七六頁。
- (25) 『全訳』、三一〇頁、三二三頁。
- (26) この『李退溪書抄』は、阿部吉雄編『李退溪全集 日本刻版』（李退溪研究会、一九七五年）に収録されており、陶山書院にも一九二九年に刊行された『李退溪書抄』が蔵せられている。
- (27) 中国哲学研究者の岡田武彦（一九〇八—二〇〇四）は、以下のように述べている。「明治二十四年、六十歳のときに、『日本道学淵源録』の増補を作ることを志し、翌年『崎門学脈系譜』の著述にかかった。これらの著書は明治三十六年（一九〇三年）、七十二歳のときに完成した。碩水によって増補された『日本道学淵源録』は、崎門学派の資料を集めた点では最も完備したものであるが、増補にあたっては、各地で資料を探索募集した。碩水の意を承けてこれを完成したのは端山の子、海山（正翼）であった」（『楠本端山・碩水兄弟の生涯と思想』『江戸期の儒学——朱王学の日本的展開』木耳社、一九八二年、三八五頁）。
- (28) 『全訳』、四六九〜四七〇頁。
- (29) 難波征男・岡田武彦『月田蒙斎・楠本端山』明徳出版社、一九七八年、一七三頁。
- (30) 『月田蒙斎・楠本端山』、一一〜一二頁。
- (31) 『碩水遺書』「隋得録」三、内田周平編『碩水先生語略』谷門精舎、一九三五年、三六面。引用は、岡田武彦『山崎闇斎』明徳出版社、一九八五年、一六八頁による。
- (32) 「碩水先生遺書卷一一」、岡田武彦など編『楠本端山・碩水全集』葦書房、一九八〇年、二四〇頁。
- (33) これについては、別稿で詳論したい。さしあたり、「楠門学と李退溪——闇斎の学と退溪の道」『江戸期の儒学——朱王学の日本的展開』と、柴田篤「楠本家三代の家学と退溪学」『中国哲学論集』第三一・三二号、九州大学中国哲学研究会、二〇〇六年二月を参照のこと。
- (34) 「楠門学と李退溪」、四二四〜四二五頁。
- (35) 「楠門学と李退溪」、四二六頁。
- (36) ただし、岡田によれば、「東野（元田永孚）は退野・深淵に私淑し、「嗚呼非林非伊又非崎、吾服東肥両夫子」といい、闇斎の敬義学・伊藤仁斎・東涯の古義学、林門の朱子学にも批判的であった」（『楠門学と李退溪』、四三〇頁）という。なお、横井小楠については、平石直昭「主体・天理・天帝（一）——横井小楠の政治思想」、「主体・天理・天帝（二）——横井小楠の政治思想」（『社会科学研究』第二五巻第五号、第二五巻第六号、東京大学社会研究所、ともに一九七四年三月刊行）、源了圓『横井小楠研究』（藤原書店、二〇一三年）、荻部直『歴史という皮膚』（岩波書店、二〇一一年）などの、横井小楠（および元田永孚）の「公・私」「公共性」などの問題をめぐる優れた研究がある。本稿では、こうした先学の研究を踏まえながらも、多岐にわたる横井小楠の思想それ自体を論じるよりも、主に大塚退野から始まる「熊本実学派」と李退溪との関係づけをめぐる言説に絞って議論を進めた。池田勇太『維新変革と儒教的理想主義』（三川出版社、二〇一三年）には、横井小楠の「熊本実学派」と李退溪との関係について触れている箇所が二箇所みられるが、それは本稿が捉えなおしを試みる既存の説を継承するにとどまるものである。その他、「李退溪に私淑」した大塚退野との関わりにおいて横井小楠を論じた研究には、平石直昭「大塚退野学派の朱子学思想——小楠朱子学との関連で」（『横井小楠 1809—1869——「公共」の先駆者』藤原書店、二〇〇九年所収）、北野雄士「近世熊本における朱子学の一系譜——大塚退野・平野深淵・小楠」（『横井小楠 1809—1869』所収）、大塚退野、平野深淵、横井小楠——近

世熊本における「実学」の一系譜」（『大阪産業大学論集 人文科学編』第一〇七号、大阪産業大学学会、二〇〇二年六月）などがある。「道義」「道義国家」言説上に表れた横井小楠像については、拙稿「小楠問題」を語りなおす——「道義」・「道義国家」言説の系譜学（平石直昭・金泰昌編『横井小楠——公共の政を首唱した開国の志士』東京大学出版会、二〇一〇年）を参照されたい。

- (37) 難波は、楠本碩水の師である「月田」蒙齋が熊本に乗り込んだのは、実学党がすでに挫折し、その実学党への迫害もようやくおさまってきた頃であった。したがって蒙齋は、直接実学党と激突することはなかったが、「……」城下における実学党の動向に対して、冷静な判断を下していたと考えられる（『月田蒙齋・楠本端山』、六一頁）という。また、岡田は、李退溪と李退溪を「尊信」した大塚退野を「称賛した」碩水の朱子学が「伊川の学風を多く継承した朱子と同じように、異端異学から道学を厳しく守ろう」としており、「だから碩水の方が端山よりも伊川・朱子学の学風をよく継承しているといえるかも知れない」（楠本端山・碩水兄弟の生涯と思想、四〇二〜四〇三頁）という。

- (38) 「楠門学と李退溪」、四三〇頁。
- (39) 伝記学会編『山崎闇齋と其門流』（明治書房、一九四三年）の付録にある池内幸二郎編の「崎門道統略図」にも元田およびその師である横井小楠は含まれていない。

- (40) 岡田が『崎門学脈系譜』を訂補する前に、増訂・補録の過程がある。
- (41) また、徳富蘇峰の父徳富洪水（一敬、一八二二—一九一四）、および、洪水の弟徳富龍山の名も連なる。

- (42) 『山崎闇齋と其門流』「序」、三頁。

- (43) 山崎正重編『横井小楠遺稿』日新書院、一九四二年、一三〇頁。

- (44) 九州大学の中国哲学教授であった福田殖（一九三三—二〇一六）によれば、横井小楠の「徳富一敬宛書簡」の「第一は須らく先ず世間の窮通得失、

荣辱利害を將つて、一切これを度外に置いて、以て靈台（こころのこと）を累はさざるべし。既にしてこの心を弁じ得れば、即ち患ふ所蓋しすでに五七分休歇せん」という、『自省録』開巻第一頁（出処は『退溪文集』巻十四所収の「答南時甫」第一書の「別幅」）が引かれているという。福田殖「李退溪の『自省録』について」『文学論輯』第三六号、九州大学教養部文学研究会、一九九〇年一月、一六九頁。

- (45) 『横井小楠遺稿』、一三〇〜一三二頁。

- (46) 「大塚退野並びに其学派の思想——熊本実学思想の研究」『九州儒学思想の研究』謄写版、一九五七年、二頁。

- (47) 「読西依答問説」、一八四七年一月。沼田哲「元田永孚と明治国家——明治保守主義と儒教的理想主義」吉川弘文館、二〇〇五年、六六頁から再引用。

- (48) 元田永孚「教学大意私録」、一八七〇年閏一〇月。海後宗臣「元田永孚」日本教育先哲叢書第一九巻、文教書院、一九二頁。

- (49) 「還暦之記」、元田竹彦・海後宗臣編『自伝・日記』元田永孚文書第一巻、元田文書研究会、一九六九年、二七頁。この第一巻の解題によれば、「還暦之記」は「元田は明治十一年十月一日に起筆し、これを明治二十二年十二月二日に浄書し終わつたとみられる」（三五六頁）という。

- (50) 内田周平「熊本学風の歴史的観察」『九州史談会報』第一号、九州史談会、一八九七年六月、九頁。

- (51) 松田甲「儒教より観たる内鮮関係の二三例」『朝鮮』朝鮮総督府、一九二二年五月、一四三頁。

- (52) 引用は、内田周平「遠湖小品」乾、巻一、正誼塾、一九四二年、一九面。

- (53) 『李退溪』、八一頁、『日本朱子学と朝鮮』東京大学出版会、一九六五年、四八七頁（註六）。

- (54) 『日鮮史話』第六編「はしがき」において、松田甲は次のように述べている。「茲に『日鮮史話』第六編を出すに方たり、特に収むるに李退溪に関して叙述せる拙稿六種を以てした。是れ今年は退溪の歿せる庚午の年より恰

も六周の庚午に回還し、春秋を経ること正さに三百六十年、最も追遠の意を表すべき歳次たるが故で、乃ち記念の爲めに外ならぬ。「……」今や世道人心漸く頹廢、最も風教の振作を要する際、日鮮儒学に関係ある退溪の潜功幽徳は、大に追遠頌述の要ありと思ふ。読者にして幾分にも、本編特輯の意を諒察せらるれば幸である。

(55) 『日鮮史話』第六編「自省録と朱子書節要」、四七〜四九頁。

(56) 『日鮮史話』第六編「日本朱子学者の李退溪観」、一一七頁。

(57) 『李退溪』「序説」、四頁。

(58) 徳富猪一郎編『増補』元田先生進講録』民友社、一九三四年(初版の『元田先生進講録』は大坂毎日新聞社、一九三〇年)、八頁。この書物に先立ち、元田永孚進講『経筵進講録』(鉄華書院)が一九〇〇年に刊行された。元田はまた、「先皇の至徳大道を實踐するに足らざれば、我神聖の道、孔子の学と同じからず」(『増補』元田先生進講録』、八頁)と述べている。

(59) これをめぐって徳富猪一郎(蘇峰)は一九〇〇年三月に、「抑も翁(元田を意味)は明治の醇儒にして、堯舜孔子の道を以て、我が今上天皇に伝へ奉りたる人也」(『増補』元田先生進講録』「元田先生進講録付録」、一頁)と述べている。

(60) 元田竹彦・海後宗臣編『書經講義・論語講義』元田永孚文書第三卷、田文書研究会、一九七〇年、二三―三頁。この書物の「解題」によれば「論語講義は元田家所蔵の稿本『論語講義一―三』三冊を収載したものである。「……」稿本表紙によつて、この論語講義は印刷局が中心になつて行われ、「……」四十人も出席していた。「……」この稿本には本文記述の間に年月日の記録が入つている。最初は明治十四年十二月であつて、その後明治十九年十二月六日「十九年回終」に至るまで、記されている(四三四頁)といふ。

(61) 『書經講義・論語講義』、二三〇頁。

(62) 『自伝・日記』元田永孚文書第一卷、一九六九年、一七七頁。

(63) 「山崎闇齋の著書に就いて(一)——主として朱子学関係書の略解」『漢学会雑誌』第一卷第一号、東京帝国大学文学部支那哲文学研究室、一九三三年六月、四七頁。また阿部は、次のように述べている。「其の学問の大眼目とする所は我国に綱常の道を扶植し、大義名分の何たるかを教へ以て我国体の尊嚴なることを顕揚するに在つた。即ち其の志より云へば我國の道を明かにせむが爲めに朱子学を以て学問の比翼となしたのである。此の大眼目を立てた所に闇齋の学者としての大見識があり闇齋学の重要な歴史的な意義がある」(山崎闇齋と其の教育)、三三七頁。

(64) 「山崎闇齋の著書に就いて(二)——主として朱子学関係書の略解」『漢学会雑誌』第一卷第二号、一九三三年一〇月、一一五頁。

(65) 『李退溪』「はしがき」、二頁。

(66) 『李退溪』、八二頁。

(67) ポール・A・コーエン『知の帝国主義——オリエンタリズムと中国像』佐藤慎一訳、平凡社、一九九八年。

(68) 『李退溪』、五一頁。

(69) 『増補』元田先生進講録』「教育勅語四十年」、一〜二頁。

(70) 「我が師表の李退溪先生(上)」『地方行政』大韓地方行政共済会、一九五九年、二二八頁。

(71) 「我が師表の李退溪先生(中)」『地方行政』、一九六〇年、二七五頁。